【研究名】: カペシタビンがワルファリンの抗凝固活性に及ぼす影響

【目的】

カペシタビンは、経口のフッ化ピリミジン系抗がん剤であり、段階的にフルオロウラシル(5-FU)に変換されることにより、骨髄細胞や消化管では活性体になりにくく、全身の曝露を最小限に抑えながら、腫瘍選択的に5-FUへと変換されることを目的としてデザインされ、乳がん、結腸・直腸がん、胃がんにおいて近年広く用いられている薬剤です。

フッ化ピリミジン系抗がん剤は、ワルファリンとの併用により、ワルファリンの抗凝固活性が増強することにより出血を引き起こす恐れがあります。フッ化ピリミジン系抗がん剤とワルファリンの相互作用のメカニズムについては、フッ化ピリミジン系抗がん剤の活性代謝物である5-FUあるいは5-FUの代謝物等によりCYP2C9の量が減少し、S-ワルファリンの代謝が低下するためではないかと考えられています。

しかしながら、現在、カペシタビンとワルファリンの併用に関する文献は少なく、併用による抗凝固活性増強の発現時期や、その程度などの情報が十分に得られていないのが現状です。そこで、本研究ではそれらを明らかにするためにカペシタビンとワルファリンを併用していた症例について調査、検討を行います。

【研究意義】

カペシタビン併用時のワルファリン治療における安全な血液凝固能管理の確立への寄与が期待されます。

【研究内容】

カペシタビンとワルファリンを併用経験のある患者さんを対象に、性別、年齢、がん種、ワルファリン療法の対象疾患、服薬歴、PT-INR値などを調査します。

【研究期間】

2013年10月～2014年9月の1年間を予定しています。

【患者さんの個人情報の管理について】

厚生労働省「疫学研究に関する倫理指針」に基づいて患者さんのプライバシーを守るよう努めています。結果の発表や出版に際しては個人が特定できるような情報は掲載しませんので、患者さんの不利益となることはありません。

【研究実施体制】

愛媛大学医学部附属病院　薬剤部

教授　　荒木　博陽

講師　　田中 亮裕

薬剤師　田中　守

薬剤師　守口　淑秀

薬剤師　上野　昌紀

【研究成果】

カペシタビンとワルファリンとの相互作用と思われる症例は 3 例あり、3 例ともワルファリンの INR は上昇しました。ワルファリン治療時にカペシタビンを併用することは注意が必要であることが明らかとなりました。